

福生第一国民学校の『防空日誌』

について

—福生の戦禍にふれて

立川 愛雄

はじめに

この『防空日誌』は、当時の校長であった浜中雄一先生が、昭和十九年十一月一日から終戦の二十年八月十五日までの二八九日間、自ら克明に記録されたもので、この間、警報発令四〇六回、うち空襲八五回とある。

この種の文書のほとんどは、『軍事教育用資材また利敵物品』として、敗戦後、早急に焼却・破砕するように指示されたものであって、現存する『防空日誌』は、銃後史の資料としてまことに貴重なものであろう。

昭和二十年八月十四日、憲兵司令部本部長は、憲秘総第 二六一号「書類処理に関する件」の通牒を発している。

「武装解除を予期する書類焼却に関しては八月十四日電第一、二〇五号の通りなるも、敵手に渡り害あるもの

例えば外事防牒・思想治安等の関係文書、国力判断可能の諸資料並びに秘密歴史等は必らずなるべく速かに焼却するを要す。また暗号書、憲兵隊職員の兵籍、職員表、未処理の経理及び庶務関係書等は用済みまで残置せられなく、特に将来にわたり保存を可とするもの（例えば左翼要注意者連名簿等）は巧妙に他に移しおくを一案とす。」

〔極東国際軍事裁判速記録第四百十八号〕

秋川市の永井美枝子さんは、「あの日、終戦の詔勅を女学校の学校工場でいき、予測のつかない明日からの生活を恐れながら家路を急いだ。私の家のすぐ近くに、福生の憲兵隊（現マルフジ銀座店）があり、その中庭で山と積み上げた書類を焼いている何名かの憲兵の姿を今でも忘れない。

——その同じ場所ですい数ヶ月前、射ち落とされたB 29からパラシュートで降りた米兵が、目かくしされ銃剣でこづ

かれていたことがあった。私が見た最初の米兵であった。憲兵隊の煙は、十五日の夜、いつまでも空に立ち上っていた。あの日焼かれてしまった書類には……………」

四〇年経って私たちは秋川のあちこちを歩いてみたが、戦争を記録するものはほとんど残っていない。……………」

〔秋川市の戦争体験を語りつぐ——第4号〕

青梅国民学校では、「戦時教材、教具の処理が行なわれた。占領軍の進駐を直前にして、早急にこれらのものを焼却・破碎（原型をとどめぬようにとの注意がある）を行なうことは相当骨の折れることであつたろう。中には貴重な図書・什器もあつたと思われるが、それを判定し、また隠匿するだけの余裕はなかつたと思われ、多くの貴重な学校の歴史的文書もその保存の適否を論ずる暇は到底なく、匆忽のうちに焼却され、あるいは散佚したと思われる。」〔青梅学校百年史〕

終戦直後、いづこともなく町村役場へ指令された「戦力の推計できる諸書類、資料は完全焼却せよ」が実行され一部資料を除いては、戦時下の住民生活、産業、経済その他の資料は皆無となつてしまつた、と。〔奥多摩町誌〕

『日誌』はどうして生れたのか

筆者の浜中雄一先生はすでに亡く（昭和四一年死去）、当時の教頭並木米一先生（五日市町在住）は、『防空日誌』な

るもの存在さえお知りにならない。羽村町に御健在の当時、瑞穂第一国民学校長の池田好之助先生（明治二九年生）は、『私の記憶によれば「学校日誌」以外に作成記録した覚えがない。浜中先生はまことに几帳面な方なので、独自に記録をつづけられたものであろう。』と語られた。

今はそれは知る由もないが、『公簿』ではないという。

『防空日誌』には、天候、警報の種類と発令・解除の時刻、次に「御真影奉護状況」と「校舎施設人員、一般状況」及び「参集職員」など、まづ先に御真影の安全を確認している点に、当時の国家主義教育の一端がうかがえるところであり、本日誌が作成された所以でもあろう。

『御真影』とは、天皇・三后（皇后・皇太后・太皇太后）の写真をいう。明治二十年から府県立学校へ、二十二年十二月からは府県立以外の高等小学校にまで、天皇・皇后の御真影が下附された。二十四年六月の「小学校祝日大祭日儀式規程」では、

『御影』に対し、最敬礼、兩陛下の万歳を唱えることで儀式を始めることとされて、奉安所・奉安殿の設置が義務づけられていた。

天皇神格化のすすむあまり、これが重庄によって焼失などの責を負い、自決する校長まであつたという。

「必ず邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す」との言葉であまりにも有名な『学制』が頒布されたのは、明治五年（一八七二）八月三日である。「その身を



修め、智を開き、才芸を長ずるには、学あらざれば能はず、是れ学校の設あるゆえんにして……」とあった。

同十二年（一八七九）九月二十九日には「教育令」の制定。同十九年（一八八六）四月十日には「小学校令」が改めて公布された。これは十六条から成るきわめて簡単なものではあるが、それに示された事項は、今までの「学制」以来の教育方針を刷新した改革であった。つまり在来の「文明開花」の風潮のため、あまりにも欧米的であった教育を一大転換して、義務教育の確立から、そして「富国強

兵」への国家主義教育が確立され、さらに、明治二十三年（一八九〇）十月三十日換発された「教育勅語」によって、日本の教育への将来に向けての方針を明確に決定された。御真影の奉拝と、教育勅語の奉読は厳粛な学校行事となった。

この時代、学校教育の中心となるものは、「御真影」と「教育勅語の謄本」である。この二つに何事か起れば、学校長はただちに一命を投げださなければならなかった。「学校防空指針」においても、一に「御真影・勅語謄本の奉護」であり、以下に「学生・生徒児童の保護」の順になるのであった。

『防空日誌』の筆者である浜中雄一先生は、『福生一小九十年誌』（昭和三十七年刊行）に、「戦時中の幻を追って」と題して次のような手記を寄せておられる。

「私が当校に御厄介になったのは、昭和十七年五月で、それ以来十六年間の勤務、日華事変から太平洋戦争へと進んで次第に戦局は重大化を加え、剩さえ物資は欠乏し、爆撃は国内にまで及んでいる中で、教育を障害から守り、それと共に戦争遂行をおし進める労苦は、到底常識の及びもつかない困難があったことである。……………」

校長として子供を守ること、御真影奉護は第一に重大であった。いつでもこの事が頭から離れない。或る空襲の夜、御真影を背負って学校から避難させる。三人の職員をつけて非常の場合の処置を与えたのであったが、此の時は、学校の防空壕では奉護出来ぬと思ったからであった。……………」

昭和十九年になると、米軍の総反攻に備えて、二月二十五日には、『決戦非常措置要綱』が決定された。

六月十五日、米軍サイパン島に上陸。十六日には北九州に米機が来襲する。

七月九日、米軍サイパン島占領を声明。十八日、東条内閣総辞職。二十一日、米軍グワム島に上陸。

八月四日、大都市の学童集団疎開が始まる。

このころ『防空日誌』が編綴された。昭和十九年九月以降とあるのだが、当地への空襲開始は、十一月一日からであった。それから、終戦までが克明に記録されている。

しかし、米軍による日本空襲はこれ以前にすでに行なわれていたのである。

昭和十七年四月十八日、ドウリットル中佐が洋上空母からB25を発進させ、東京をはじめ日本の五都市を奇襲した。

ついで昭和十八年十一月、在中国米第一四航空軍がB25をもって、台湾の新竹海軍基地を攻撃、さらに、翌年一月には、台湾の高雄、塩水基地を爆撃した。

昭和十九年六月には、B29を保有する米第二〇爆撃集団が、中国成都に進出し、六月十六日から数回にわたって、主として北九州の八幡製鉄所を攻撃し、その後ほかに佐世保・長崎・大村・大牟田をも攻撃している。

『防空日誌』は、これらの日本爆撃ののち、マリアナの基地を手に入れた米軍が、日本本土壊滅のための作戦を展開しはじめた時期からの記録である。

『福生の戦禍記録』と戦局の推移

本『防空日誌』は、福生第一国民学校で作成記録されたので、学区内の記述が主であって、市内の熊川（第二国民学校学区内）地区の状況にはふれていない。

福生地区は、福生飛行場（現米軍横田基地）を温存する魂胆あり（？）てか、ほとんど戦禍なく、死傷者もなかったのだが、熊川地区には、再三の爆撃をうけ、家屋の焼失または全壊・大破をうけ、被爆による犠牲者も出している。

昭和十九年十一月一日、晴、午後一時二五分突如として空襲警報が発令された。「御真影」は「空襲ト同時ニ奉護ノ為奉遷。解除（二時五〇分）ト同時ニ殿内ニ奉安。御異状ヲ拝セズ」、「校舎施設人員其他状況」は「被害其ノ他ノ異状ナシ。児童直チニ下校」とあって、「参集職員」は、「全職員」とある。午後四時三〇分には警戒警報も解除されるが、さらに、午後九時四六分警戒警報が発令される。同一一時四〇分解除となり「御異状ヲ拝セズ」その他も「異状ナシ」と記録されている。

かねて予期したものの、この侵入機は、マリアナ基地より飛来したB29一機で、東京へは初の来襲で投弾することもなく、以後、二日、五日、六日、七日と昼間来襲したが「異状ナシ」。米軍のその後の発表によれば、偵察飛行で、敵は東京の攻撃目標を航空写真で完全に把握したのであっ

た。

十一月二十四日から、東京都内への本格的な空襲が開始され、連日B 29の来襲となる。十一月中、空襲七回発令。

十二月はB 29の小數機(一―二機)が最もひんぱんに来襲して、二三日間に空襲一二回を含めて五―三回警報が発令され、東京だけでも爆弾約七〇〇発、焼夷弾約四、〇〇〇発を投下された。この月の空襲による死傷者約七〇〇名、家を失ったもの約三〇〇〇名におよんだ(警視庁調べ)という。

B 29が東京に来襲する時のコースは、サイパンから真つすぐに富士山をめがけて北上し、伊豆半島附近で進路を北東に向けて侵入するのが普通だった。そのため多摩地区は、直接の目標になっていない時でも、空襲警報が発令され、敵機が上空を通過するのを目撃することがしばしばであった。

一月から四月二十五日まで

昭和二十年一月一日 早曉四時五四分警戒警報発令

東京にはB 29一機が侵入、焼夷弾が投下されて、前夜からの連続の来襲攻撃、この国の歴史にかつてこんな殺伐な歳の初めがあったであろうか。東京の下町にさらに七〇〇発の焼夷弾が投下されたという。当方は「異状ナシ」。

小磯首相は年頭の辞をラジオで、「敵はずでに頭上に迫

っている」、「いまや比島全域が天王山である」と叫んでいる。四日、五日、六日、七日と警報発令されたが「異状ナシ」。

九日「敵機十數機頭上ヲ通過、友軍機ニヨリ火ヲ吹キ墜落セルヲ目撃ス、感無量知ラズ熱涙アフル、当地ニ不発弾三発落下」するが「異状ナシ」。白昼の上空、衆人環視の中、体当り自爆三機、戦死者三名、生還者三名。

砂川上空でB 29の真上より垂直に体当り撃墜、自らは落下傘により生還したのは高山少尉であった。当方の戦果は、撃墜一機、うち体当り六機を確認した。

一月中、三四回の警報発令うち空襲警報は二回であった。二月になると、テナヤンの北飛行場が米軍の手によって整備され、対日爆撃のためのマリアナの戦力が強化された。

二月十六・七兩日、米空母機動部隊の艦上機は、東京地下各地及基地飛行場等を波状攻撃し相当な被害を与えた。

十六日四回、十七日に三回の空襲警報は、実に三十三時間にわたるもので、これらは、敵の硫黄島攻略に対する呼応作戦で、わが方の予想をはるかに上回る熾烈なものであった。この日、福生飛行場も不意をつかれ大混乱となった。

十九日、米軍はついに硫黄島上陸を強行する。

二十五日「敵艦載機六〇〇、四機北方ニ見エ空中戦ヲナス、B 29二〇〇機帝都ニ向フ、頭上ニ爆音ヲキクモ、異状

ナシ」とあるが、この日、艦載機六〇〇機は、関東東部および北部の空をわがもの顔に乱舞、縦横に攻撃、B 29七梯団二〇〇機（実は一二七機）は、東京に対し本格的な焼夷爆撃を行ない、東京の家屋の一〇％を焼いた（米軍発表）。

二月中、警報発令四六回、内空襲警報一回におよぶ。

三月十日、東京大空襲。「B 29数十機帝都旋回爆撃ス、東方ニ追撃ノ砲火見ユ、一天紅ニシテ大火災ノ発生ヲ思ハシム、異状ナシ」とあるが、平穩な九日が終わろうとした夜半、東京は夜間初の焼夷大空襲をうけ、町々は炎の地獄と化した。三時二〇分警報は解除されたが、東京は四〇平方キロ、約二五万戸の家屋が焼かれ、約八万五千名が焼け死に、四万名が火傷をうけ、約一〇〇万名が家を失う。東京の町は一夜にして、一望の廢墟と化したのであった。

十七日、硫黄島の日本軍守備隊は玉碎し、これより本土空襲はいよいよ激化、主要都市への無差別爆撃がはじまる。十八日、閣議は「学校授業の一年間停止」を決定（国民学校初等科を除く）するのである。

三月中、警報発令三二回、内空襲警報は三回であった。このころまで、福生地区には戦禍らしきものはなかった。四月一日、米軍、沖繩島に上陸する。

二日、B 29早曉来襲。「東方ニ敵機ノ音ヲキキ照明彈落下ヲ見ル、火ヲ噴ク敵機五機認ム、落下弾ノ音アリ……当方異状ナシ」（田無・立川の飛行機工場襲撃される）

四日、零時五九分より四時一五分まで空襲。「B 29低空房総ヨリ次ニ伊豆方面ヨリ侵入、イヅレモ一、二機波状ニテ北関東、立川方面爆撃、熊川地帯ニ爆弾投下五ヶ所高射砲シキリ破片落下スルモ異状ナシ、立川方面火災起ル照明弾シキリ」、なお「第二校（国民学校）ヨリ御影奉遷」ありと特記している。

この日、熊川地区に五ヶ所、八戸が爆風のため全壊・大破した。熊川字南の雑木林（俗称しどめ山、現村内ホビー付近）、から北へ、第二国民学校への線上に十一発（高水茂一氏は二二発、町田政雄氏は三三発ともいう）の爆弾投下。熊川二〇四番地の町田政雄、同町田文蔵、同小山勘兵衛、熊川二〇五番地の斉藤新一、同吉崎金次郎、熊川二七四番地の野島秀一（現信一）同二五三番地の内山滝蔵（現一男）同三六九番地の天野茂一（現治雄）の各家で、直撃弾によるものではなく、いずれも至近弾による爆風のためであった。

この時、防空群長とし消防団員でもあった内山滝蔵（五〇歳）氏は班員の待避誘導とともに対空監視中、自宅前で爆弾の破片を腹部にうけ、殉職死された。斉藤新一（三〇歳）氏は被弾重傷で、立川病院に收容されたが死去される。熊川三六〇番地の佐藤でん氏の二女キミ（二歳）さんは、自宅内で腹部へ被弾即死され、母親は右脛部に重傷をうけられた。

来襲時、まず照明弾二個を投下した後、爆弾を投下した。

真暗な空に何万の電灯が一度にともったような、まぶしい光の玉がゆっくりと落ちてくる不気味さに、人々は恐れおのいた。深夜ながら屋外で新聞が読めるほどであった。内山滝蔵さんは、大戦にともなう殉職者として、福生市においては、忠靈塔建立に際し合祀してその霊を弔った。さらに、昭和六十年六月二十九日付をもって、勲八等白色桐葉章を下賜されたのである。

四月八日、鈴木貫太郎海軍大将に組閣の本命がくだる。「八十歳になんなんとする老軀をひっさげての最後の御奉公、諸君！わが屍を乗り越えて進め」と決意を語らる。

十二日「B 29数十機来襲ノ報アリ、上空ヲ関東西北二向フヲノゾム、高射砲盛ニ上ル、多少破片落下、児童ハ警戒ニテ下校、異状ナシ」。この日、中島飛行機武蔵工場が攻撃されて壊滅的損害をうけたのである。

十三日夜「B 29百数十機房総ヨリ帝都ニ侵入、東方ニ火災ノ天ニ沖スルヲ見ル、敵機ノ墜落ヲ望ム、当地ニ来襲ナシ」。明け方まで東京の空は、赤々と燃えつづけた。

十五日深夜、B 29二〇〇機、房総、伊豆方面より京浜地区へ侵入。しかもきわめて低空から油脂焼夷弾と爆弾の混投攻撃を行なう。保土谷、品川その他を焼き尽した。

「敵機約二百機帝都南部ヲ主トシテ爆撃、高射砲ノ為墜落サルルヲ五六機見ユ、上空ニテ空中戦ヲナス砲声カマビスシ」。この日の投下焼夷弾は四、八五六発以上とか。

二十四日朝、B 29一三〇機をもって、立川を爆撃した。

「B 29多編隊南方ヨリ東北進スルヲ見ル、立川、村山方面ニ爆発音ヲ聞ク、校舎等ガラス振動、児童ハ登校未ダ少ク直チニ下校、異状ナシ」。この日の立川の被害は家屋三五戸、死傷五一三人、軍施設と市民にもおよんだ。

『防空日誌(一)』は、四月二十五日で終る。

この日まで、警報発令は一九九回、空襲警報四三回。

四月は、沖繩進攻作戦と軍需工場攻撃に終始したのだが、また、都市焼夷攻撃も再開される。

軍事施設や兵器工場の爆撃は、かならず好天の日の昼間に来襲するのは、投弾の命中確率を考慮してのことだろう。だが、夜間の都市焼夷攻撃は、市街地無差別じゅうたん爆撃で、これは盲爆であり、市民の殺戮をあたりまえとはばからぬ。

四月二十八日から記録再開 『防空日誌(二)』

この日、二〇〇回目の警報が発令、午前中二回も警戒警報が発せられて、在校児童は至急下校させたが異状なし。

二十九日「天長節拳式ノ為、講堂ニ奉遷中ナリシタメ、直チニ(御真影)殿内ニ奉安、御異状ヲ拝セズ」、「拳式中ノ為至急式ヲ終リ直チニ児童下校、異状ナシ」とある。

三十日空襲警報早朝より二回発令、B 29一〇〇機、P 51一〇〇機をもって立川が攻撃された。かつてないP 51の掩

護戦闘機の多い昼間来襲であった。「立川方面ニ爆発音聞ユ、高射砲彈落下ス」とあるが、当方は幸い「異状ナシ」。五月に入り連日の来襲、警報発令五四回、内空襲八回におよび、底をついた日本の航空戦力は無力化し、沖繩の戦局も悪化、状況はほとんど絶望的ともいえる。口にはださないが国民はみな、内心深くこの戦況を憂えているのであった。

「一般稍々氣力低調ノ為カ隣組ニ於テ燈火ノ附ケ放シアリ学校長飛ビ込ミ消燈ス、一軒寢込ミ何等処置ニ出デザルハ遺憾」。さらに「女子警備員不馴ノ為、不謹慎ノ態度アリ注意ヲ与フ」(五月五日)

「真ノ闇夜敵機ノ音キコユルモ燈火ノモレルアリ、遺憾ナリ、学校ヨリラジオノ電灯モル注意シ中止セシム」と。五月十四日、反省。さらに同十七日にも、次のように記す。

「職員中逃避的ノ態度不謹慎ナルアリ遺憾注意ヲ与フ」。十九日、この日空襲あり、開戦以来最もはげしく敵機の本土跳梁の日だが、むかえうつつ日本機は一機もなかった由。二十四・五日両日の山の手の二度の大爆撃に、これまでの東京空襲の被害を加えると、東京の半分以上は焦土と化する。

連日警報が発令されるが、当方は「異状ナシ」であった。五月八日、ドイツの降伏で、日本は唯一の同盟国を失っ

たばかりか、ここで連合国は、莫大な陸海軍の兵力を東亜に回航展開できることとなった。このころ、日本の空海の戦力はほとんど消磨し、残っているのは本土の陸軍戦力だけとなっていた。米軍は日本本土上陸戦として、昭和二十一年十一月一日の九州進攻作戦(オリンピック作戦)と、また東京を目指して、昭和二十一年三月一日の本州進攻の主作戦(コロネット作戦)を策定していた。そして、この両作戦には約三〇個師団の米軍大兵力が予定されていたのだ。

六月に入ると、敵機は日本本土をおおう。十五日B29五一六機がマリアナを離陸し、その四四四機が日本の空から三、一五七トンを投弾した。それで、日本の京都をのぞくすべての大都市を壊滅させ、大都市攻撃を終了したのである。

六月二十二日、天皇は、初めて「すみやかなる和平」の実現を要望され、ソ連を仲介とする和平実現のためモスクワへ特使派遣が決定された。六月二十一日、沖繩玉砕。

六月中の警報発令三三回、内空襲四回で、十一月以来二四三日間、警報発令二八三回、内空襲警報五一回におよぶ。

七月に入り、米軍は日本本土に対し、最後の大詰の「戦略爆撃」を開始するため、特に太平洋戦略空軍を新設し、第二〇航空軍と、第八航空軍がその指揮下に入り、その司令官には新しくルメイが昇格任命された。

八日「一二時一〇分空襲、小型機ノ来襲アリ、一、二ノ

飛弾アリシモ異状ナシ、四機整備部隊（福生基地）ニ銃撃ヲ加フ、高射砲隊戦果ヲアゲ」とあるが詳細は不明。

この日B29に誘導されたP51一五〇機で東京・横浜・千葉を攻撃。いずれも基地攻撃であったのだ。

本土空襲はさらに激化し、連日数百機にのぼる敵機が北海道を除く東北、関東、中部、九州と日本本土の空を乱舞した。これに対するわが本土の専任制空部隊の兵力はわずか二三二機にすぎなかった。（『本土防空作戦』）

十七日、米英ソ首脳によるポツダム会談が開かれる。

二十六日、対日ポツダム宣言が発表されたが、これに対して、鈴木首相はその内容検討にはいっていないながらも、軍部の圧力で、「ポツダム宣言は〈黙殺〉する」と記者会見で発表してしまった。連合国側はそれを額面通り受けとった。この言葉は、「拒否した」と伝えられたのである。

B29による中小都市の焼夷攻撃は、七月に入りにはわかたにエスカレートした。それはB29約二、七六〇機をもって日本本土におよんだもので、七四都市を攻撃し、さらに七月下旬からは、この都市爆撃に事前の予告を行なって、国民に対する心理的効果をたかめていった。

敵機動部隊は七月中常時日本近海を遊弋し、のべ一萬一、三〇〇機の艦上機を日本本土に放った。また硫黄島を基地とするP51ののべ一、五〇〇機もこれに加わり攻撃を行った。このころ日本本土の港湾は完全に封鎖されていた。

七月中、警報発令一〇二回、内空襲二〇回におよぶ。

八月一日、この日福生では鎮守さまのお祭りである。空襲はますます激しく、お祭りどころではなかった。しかし若者は、どうせ戦争でいつ戦死するかわからぬ身である。

せめて神輿をかつぎ、そのいきおいで特攻隊になって闘いたい……という意気をもって、福生の青年は例年の通りお祭りを実施した。熊川の青年は、時局をわきまえて自粛し、神輿かつぎをやめた。毎年、夜一〇時頃までかついでいた神輿は七時ごろで中止した。その夜、八王子の大空襲があり、西の空はまっかだった。そしてその一部が、福生駅の北側の農地に落ちたが幸い畑で被害はなかった。（橋本孝藏氏談）『月刊『ふっさっ子第三八五号』

この日、八王子市民はすでに「伝單」（ドラ）投下で空襲の予告されていたから、警報が発令されるや続々と市外に退避したため、焼夷弾に対する初期防火が行なわれなかった。このため、全市は瞬時にして火の海と化し、なすすべもなく、周辺の町村もまた大きな被害を受けたのであった。日誌によれば、「二〇時二一分警戒警報、同五四分空襲警報発令。B29百数十、一波ハ鶴見ニ侵入爆弾攻撃、二波南方侵入、突破八王子方面ニ焼夷攻撃、一部福生、熊川分ニ被害アリ、近ク二、三回ノ落下爆音ヲキク、二波ノ主力ハ王子、立川福生方面ニ攻撃ヲ加ヘ当校モ一時危険ナリシモ別ニ異状ナシ」「御真影ハ御異状ヲ拝セズ、奉護ノ為一時奉遷、一時

ハ危険ト拝シ更ニ奉還ヲ申上クベク準備申上グ」。

とあり、二日の二時四四分空襲解除、同三時二五分警報解除。

熊川の爆撃と被害

前述のように、福生学区内は「異状ナシ」だが、熊川地区には、熊川駅周辺半径六〇メートル位の所が、爆撃及び焼夷弾を浴びた(『福生町誌』七戸が全焼(『東京都戦災誌』)と報告されており、その状況は左の通りであった。

罹災者は、熊川一、〇一六番地の井上仲次郎(現礼三)、同一、〇二九番地の井上東一(現光男)、同一、〇三三番地、小林吉之助(現菊三)、同森田喜一、同一、〇三六番地の佐伯重一(現光義)、同西村近雄(現力一)、同橋本マス氏の各家が全焼したが、幸いにも死傷者はなかった。(西村家は倉庫のみで主家は無事)

近くに軍需工場(片倉工業多摩航空機製作所)があったが、これが目標とも思われず、盲爆による無残な戦禍であった。

翌朝、警報解除後、被災状況検分の憲兵に同行した、多摩製作所員川島道保氏(三四歳)は、不発焼夷弾に接触暴発事故のため受傷し、ただちに立川病院に収容治療を受けたが、二月八日死去。同所員島崎・平沼両氏も受傷したが、恢癒、憲兵某氏は即死という、痛恨事が発生したのであった。

この日、立川市域(砂川)では約百戸が焼失している。

二日正午頃B29定期便一機来るも、異状なし。

三日、空襲あり上空通過するも、異状なし。

四日・五日・六日、B29の侵入、通過するも、異状なし。

六日、広島に新型爆弾投下の旨、翌七日、大本発表。

七日、八日、九日と連日警報発令される。

八日、ソ連、対日宣戦を布告、ソ連軍国境線を突破侵入。

九日正午、長崎にまた新型爆弾が投下された。

十日、警報発令五回、十一日は、同六回におよぶ。

十三日、早朝より小型機来襲し関東地区飛行場を攻撃。

五時二八分空襲警報、さらに一時一分同発令、一七時

四〇分空襲解除、この時、熊川駅附近住民の避難誘導に活躍中の、防空群長小林吉之助氏(五二歳)は、自らは自宅

内で待機中、グラマン機からの投下弾の破片により殉職死。

「その日のお昼ごろ空襲になったんです。私と父は家に

いて、弟や妹は防空壕へ入れました。うちは一日の空襲

で焼かれちゃったんで仮小屋を作って住んでいました。

……艦載機がくるというんです。あぶないから家の

壕に入れ」というからすぐに入りました。その時、三輪

の車が(軽自動車)バタバタと音を立てていた。と思う

とそのあと、バリバリッという機銃掃射の音がして爆弾

も三発位落ちました。あの車をめがけて射ってきたんでしょう。父はあわてて逃げ出した。そこをやられたらし

いんです。飛行機が行っちゃったなと壕を出たら「おじさんがやられた」という声でした。見たら、父は無惨な即死でした。もう、ただぼうぜんと見ているだけで涙も出ませんでした。……次の日も半日空襲が続いたんですが、お昼になったらパタッと空襲が止ったんです。

「変だね」と言っていたら、その次の日に終戦だと言ってます。あと、一日か二日早く終わっていたら父は助かったのに。そのころ、私の長兄は外地に、次の兄は内地でしたが二人とも兵隊でした。姉たちも軍需工場で働いていました。私は十四歳。(内田(旧小林)チカ子さん談)

十四日、四度警戒警報が発令されたが、九時四分解除。

三重、岐阜飛行場にP51一〇〇機。九州、大阪にB29三

〇〇機来襲。近畿には戦爆で七〇機が来襲したのであった。十五日、零時二九分、五時三七分と再度空襲警報が発令されたが、七時五五分解除、一時二五分には警戒警報も解除となる。ラジオは、本日正午に重大放送あるを告げた。正午、天皇御自身のラジオ放送によって、突然、降伏を知らされたのであった。これより先、十四日、国体護持を条件にポツダム宣言受諾の旨を、連合国に伝えられた。

戦争は非情である。この日、早暁B29二五〇機は、七つの日本の都市を焼夷弾攻撃し、その町を破壊した。高崎・伊勢崎・熊谷・福島・秋田・新潟・小田原に。高崎、熊谷は一夜にして焼尽。市民はまだ余燼の残る瓦礫の中で敗戦

を知り、茫然としてなすことを知らなかったであろう。

昭和十九年十一月一日よりこの日までの、二八九日、警報発令四〇六回、内空襲警報八五回におよんだ。『防空日誌』には、「御異状ヲ拝セズ、ソノ他異状ナシ」で終始するが、市内にも、痛恨無残の戦禍があったことを記録にとどめることにした。謹んで、戦禍による犠牲者の方々の御冥福と、御遺族の皆様の平安をお祈りするものである。

この報告書作成にあたり、関係ご家族の方々よりの聞きとりと、戦局の推移と各種記録統計等については、左の諸資料を参照、引用させていただいた。

『東京都戦災誌』(東京都)

原田良次著『日本大空襲』(上)(下)〔中央公論社〕

児島 襄著『太平洋戦争』(上)(下)〔中央公論社〕

『月刊 ふっさっ子』(山崎茂男編)

(たちかわ・あいお 福生市史編さん委員 志茂在住)